

彦根城

数少ない現存天守が残る山城で、井伊氏の居城。1603年直継が築城に着手し、約20年を費やして全工事を完了。彦根山上に本丸、西の丸、鐘の丸、山下に二の郭、三の郭を置き、西は琵琶湖に臨み、三方に三重の堀を巡らす。

彦根城

The Strongest Castle

攻めろ！

「国宝五城」のひとつとして人気の彦根城。

かの昔、ここが超戦略的軍事拠点で

あったことをご存知だろうか。

戦国時代「最強」とも称される彦根城、

その強さの謎を解くためには

「彦根城を攻めてみる」しかない。

幾重にも張り巡らされた、

トラップに太刀打ちできるのか。

いざ出陣！

Navigator



滋賀県立大学教授
中井均先生

Profile

1955年生まれ。小学5年生から城郭探検を始め、現在は日本各地の中世・近世城郭の発掘調査・整備の委員を務める。講師を務めるKEIBUN文化講座は、毎回満席の人気である。先生の研究で、戦国時代の合戦の知られざる実像が明らかに！

斜面を移動する者
全てを阻止！

登り石垣

山腹を登るように築造された、高さ1〜2mの石垣を「登り石垣」といいます。斜面を移動する敵の侵入を阻止することが狙いで、彦根城にはこの登り石垣が5カ所にあります。これだけの数を備えているのは全国の城の中でもここだけ。いかに軍事戦略的に重要であったかがうかがえます。

登り石垣のルーツは、豊臣秀吉が朝鮮出兵時に朝鮮半島に築いた倭城。水軍の戦力では圧倒的に劣る秀吉軍が、港湾に登り石垣を造って迫り来る敵を防御。「これはすごいぞ」とばかりに、技術を日本に持ち帰った大名たちが築城の際にこぞ取り入れたといわれます。



苦勞して山腹を登ったら、この石垣ですよ。

心が折れますよね〜。



登ることを許さない
垂直の壁で城を包囲

山切岸

城が築かれた彦根山の山裾部分を人工的に削り取り、垂直に切り落として造った絶壁を「山切岸」と呼びます。「低いところでも4m、最大では18m。城の周囲360度に、圧倒的な高さの垂直壁を築いています。攻め登ることなんてできませんよ」と中井均先生。

この山切岸と登り石垣で攻めてくる敵を完全にシャットアウト。城内に一歩たりとも踏み入れさせないという構造は、日本最強の城と言っても過言ではありません。



天下分け目の戦いが影響
彦根築城の意図はいかに？

実は一度も実戦経験のない彦根城。何故こんなにも厳重に守りを固めたのか。それは、関ヶ原合戦以降の乱世に關連する。

慶長5（1600）年、関ヶ原合戦の戦功により佐和山城を賜った井伊直政は、新城の築城を構想するものの翌年に亡くなってしまふ。その遺志は息子直継によって進められる。築城に際しては徳川幕府が各地の大名を動員し、佐和山城をはじめとする近江周辺の城の建物や石垣が再利用された。

また、天下を二分した戦いは、あらゆるところに火種を残し、戦国時代最大の緊張関係を生み出した。天下普請として築城された彦根城。その狙いは、西国の外様大名にらみをきかせておくこと。そして大坂への包囲網として、いつまた勃発するかもしれない次の戦に向けて、鉄壁の要塞を備えたのである。彦根城は井伊家の城でありながら、徳川幕府の戦略基地として長きにわたり機能していたのである。



彦根市歴史資料館文化財課提供

攻め入る者は
撃つて撃つて撃ちまくる

天秤櫓

大坂側にあたる大手門橋と表門橋は、敵陣に対峙する際の戦略的要所でした。この守りで大きな役目を果たしたのが「天秤櫓」です。上から見ると「コ」の字型をしており、両隅に二階建ての櫓を備えています。

天秤櫓に向かう道は3〜4人が横列を組める一直線の通路。勇んで突き進めば門に突き当たります。では、どうなるのでしょうか？

「門の前で足止めを食らう敵を高い二重櫓の上から撃ちまくるんです」と中井先生。それは地獄さながらの光景ではありませんか！ 前列から順々に倒れ、後列

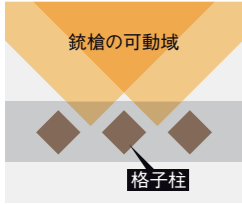


は退却せざるを得ない状況に。万が一にでも「鐘の丸」に攻め込む猛者が現れたとして…。「その防衛もぬかりありませんよ。天秤櫓からは鐘の丸の全てを見通せます。ここでも櫓の上から撃ちまくります」と非情な宣告。



櫓の中の壁は、床から2mほどを境に上部は薄く、下部は厚く造られている。敵の銃弾が人の高さのところまでは壁を貫通しないようにする工夫である。

さらに技巧派たるゆえんは、天秤櫓の中にも。窓に設置されている格子柱は、45度傾けてひし形状に固定。「銃槍の可動域が広がるため、鐘の丸を目掛けてパノラマに撃ち放題です。」「ここまでくると「心憎い」を通り越して「憎たらしい」としか言いようがありません。



琵琶湖、堀、石垣…
本丸に攻め込む前に、
相当やられてしまいますね。



総構え構造で防御。武田家ゆかりのグラウンドプランとは

城造りに関して重要なのが天守にたどり着くまでの「縄張り」(※)である。そのグラウンドプランを考案したのは、武田信玄の流れをくむ甲州流軍学者の早川弥惣左衛門といわれている。彦根城が武田家の城郭の特徴である「馬出」を備えているのは、弥惣左衛門の影響であるとか。井伊家は武田家滅亡後、その遺臣を家臣として抱えており、それが赤備えになった。

彦根城は、町全体が城郭として防御の備えをもつ「総構え」構造がとられている。内堀と中堀、外堀があり、南側の芹川も堀の役割を果たしていた。また、西側と北側は琵琶湖に面しており、こちら側も自然の堀が防衛線となっていた。恵まれた地理を生かしながら、敵が攻めてきたときには城下町全体を要塞化させる、戦略的かつ効率の良い城の縄張りを完成させたのである。

※縄張り：曲輪や堀、門、虎口等の配置のこと。城の最重要項目。



実戦に備えたやる気に満ちた裏の顔

五 天守の裏側

天守の裏側に位置する黒門橋。そこに続く黒門登城道は、両側に石垣が迫っていて、一人一人が通れるほどの細い道です。実は、この山道を抜けた先は天守から丸見え。進行してきた敵は、一人ずつ撃破するのみ。照準を定めて撃ち込めるため、効率の良い攻撃を仕掛けることができます。

本丸側からの天守は優雅で絢爛豪華な姿を見せませんが、天守の裏側は、大変質素な造りになっています。この時代の城は戦うための軍事施設であり、住居用として使用されたのは織田信長の安土城ぐらいなのだとか。実戦用に装備された、やる気満々の「裏の顔」に思わず背筋が凍ります。



表



裏

唐破風や切妻破風、花頭窓、高欄などを備えた優雅な表側に比べ、黒門側は石垣も高く、見るからに難攻不落。いくつも開いた窓からは「撃つぞ!」という無言の圧力が。ちなみに、高欄はダミーで、城主がここから城下を眺める、ということはないようだ。



橋が落とされたらこの堀底です。

問答無用の迎撃ロード

四 西の丸堀切

天守の北西に隣接する西の丸三重櫓は、深い堀切に面して築かれています。敵がここに侵入するには、この堀切を突破しなければなりません。木橋を落として、経路を断つた上で三重櫓からの集中砲火。逃れるために堀伝いを進んでも上から容赦なく撃たれてしまいます。

堀切を越えられたとしても、その先には最大三方向から狙われる死のロードとなる枅形が待ち構えています。屈曲した道の上にある高堀からズドンッ! どう進んでも撤退しても撃たれてしまう、超攻撃型の戦闘仕様なのです。

「攻めだけじゃない彦根城のこんなところも見逃さない!」



【石垣いろいろ】

時代変われば石積み技術も進化



天秤槽の石垣は、廊下橋を境にして東側と西側では石垣の積み方が異なります。東側の積み方が、自然の石をそのまま用いて積み上げる「野面積み」。西側は石を下方に落とし込んで積み上げる十九世紀の技術「落とし積み」が施されています。長い年月の間に、何度も修理が重ねられたことが分かります。



【鏡石】

見栄っぱりなドヤ顔の巨石

天秤槽へ向かう坂道、突き当たりの石垣にある大きな石。「鏡石」と呼ばれ、城の壮大さや城主の権力、財力を見せるため、門の両側や周辺の石垣に意図的に置かれたといわれています。城を訪れる客を威圧するものでした。「ドヤ、うちはすごいねんで!」と言いたいがための巨石に彦根城の威信がかけられていたのです。

【月見櫓】

名月鑑賞スポットは監視場所としての機能も



城内の中でも最も見晴らしの良いこの場所に、「月見櫓」がありました。ここでは美しい月を鑑賞できることから、この名を冠していますが「着見櫓」とも記され、彦根城内外の全方向を見渡す監視業務を行っていました。

大坂夏の陣以後は、佐和口の城門に到着する参勤交代の行列をいち早く城内に伝えるなどの任務を拝命。明治時代に櫓は取り壊されてしまい、その姿を見ることはできませんが、今も往時と変わらぬ素晴らしい眺めを望むことができます。

彦根城、攻めてはみたが…

スタッフ「彦根城って、美しくて優雅なイメージしかなかったのですが、こんな軍事的側面があったなんて驚きでした」

中井「彦根城が観光化したのは、近現代のことです。今では鐘の丸は桜の名所ですが、これは明治以降のこと。元は何もないただの広場ですから。木があるものなら、敵を撃ちにくくて仕方がない(笑)」

スタッフ「それだけ、築城された当時は緊迫した時代であったということなんです」
中井「池田、藤堂、そして井伊など関ヶ原合戦で名を上げた大名たちが、豊臣秀頼のいる大坂城を包囲するわけです。慶長年間には各地で天下普請の築城が行われています。彦根は大坂に加勢しようとする敵をここで食い止める砦の役割も果たしていました」

スタッフ「まさに戦略拠点! 城を攻める視点で見ると、これまでとは違う面を知ることができました」



中井「本来、城は戦うための施設。先人たちの英知と技術には驚かされるばかりです。今年、彦根城築城四一〇年祭も催されます。皆さん、彦根城にぜひ行ってみてください」